おじさんズ通信

２０２３年７月号（Ｎｏ３２）
発行元：登別市新生町
桃柿通　緑風舎
発行者：おじさんズ３号

発行は毎月１５日頃。バックナンバーは「おじさんズ」のホームページでどうぞ

思いでシネマ　これ“ニューシネパラ”の幌別版？

ほんの一場面だけど、これって映画「ニューシネマパラダイス」の幌別版だったと言えるのかもしれない―。子ども時代の思い出を家族と話していて、ふと映画にまつわる二つの出来事がよみがえりました。どちらも小学校入学前か１、２年生のころの話なのでトキは１９５０年代半ば、昭和３０年代初め、場所は小４の途中まで過ごした当時の幌別町（現登別市）富士製鉄社宅街です。何しろ、テレビなど一般家庭に普及していない頃の、娯楽といえば映画が一番の時代です。ささいな話題なのか、トピックスといえるか分かりませんが紙上にて、フィルムスタートです。

その１　社宅街で路上映画会

夏の暑い夜、社宅街の十字路だったか、屋根の高さくらいの所から大きな白い布が下げられました。待望の銀幕が設営され、通りにしゃがみこんだ大人も子供も年寄りも、何が上映されるのか、ドキドキ、ワクワクです。

もう忘れてしまいましたが、上映されたのは恐らく、チャンバラものの時代劇だったのではないかと…。マチ場でいう町内会の役員さん達が、汗タラタラでインスタント野外劇場を造り出し、映写技師の資格をもつおじさんがまわりからの尊敬のまなざしを背に、フィルムを回していたのでしょう。

社宅街での野外映画会
（合成イメージです）

これと重なるのが「ニューシネマパラダイス」のーシーンです。舞台は第二次大戦が終結して間もないシチリア島の、小さな村にある唯一の映画館。満席のため入館できなかった人々のために、映写技師のアルフレードは反射板を使って外の広場の壁にも映画を映し出します。この場面と社宅街での野外映画会とは、筋立てもスケールも異なりますが、「映画を観たい」という人々の願いに応えようとする、シネマを愛する裏方たちの思いは同じ、彼我の違いはないかと思うのです。

「ニューシネマパラダイス」より
壁に大写しされた映画を観る人々

蛾や蚊が乱舞しようが、なにするものぞ。鞍馬天狗か、丹下左膳か、白幕の中で快刀乱麻の活躍をみせる正義の味方にすっかり心奪われ、長屋の人々はやんやの喝采を送っていたに違いありません。

その２　怖かったね～「耳なし芳一」

映画にまつわる夏の思い出その２です。時期的にはそれほど違わない、社宅の一室での映画会の話です。近所の家で「耳なし芳一」という、こわ～い映画が上映されるというので出かけました。八畳一間、いやふすまを外し二部屋通しての、ホームシアターご近所集まれ版といったところで、もちろん入場無料です。

年配の方なら、ご存じの怪談話ですが、おさらいであらすじをチラリと。琵琶法師・芳一が毎晩乞われて、寺に無断で出かけ高貴な人たちの前で琵琶を弾く。目の見えない芳一が御殿と思ったのは平家一門の墓地で、後をつけていった寺男が見たのは無数の鬼火。住職は、連れ戻した芳一の全身に般若心経を写経し、怨霊からは透明人間になる手立てを講じるが、耳にだけは書き忘れ……。

小泉八雲の「怪談」に収められ広く知られるようになったということですが、電灯を消した部屋の壁に浮かび上がる平家武者の亡霊や、無言で怨霊が立ち去るのをじっと待ちながら、ついに芳一の耳がもぎ取られる場面を思い出すと、映画って本当にすごいですね。いくつになっても残像が消えないのですから。

野外での映画上映、隣組が集まっての室内映画会、どちらも庶民の昭和史に残したい情景です。

近日発行
文芸 のぼりべつ 42号

アナログでええじゃないか

マイナンバーカードをIT時代の最新兵器というなら、現在病院に持参していく紙の保険証はアナログ時代の老兵？　そんなことはありません。

先月、定期メンテナンスで歯医者さんに出かけました。精算の後、受付の女性に「このマイナカード読み取り機、壊れたらどうなるですかね」と尋ねたら、「さあ～、どうなるんでしょうね」と自身、首をかしげていました。

応急手当で３割負担になるのでしょうが、めでたく１割組に仲間入りしたご同輩は怒るでしょう。騒がれている誤登録や別人情報だけでなく、通信障害やシステムダウンなど、現役時代の経験から推察するにトラブルは必ず付いて回ります。

お上はなんでペーパー保険証の廃止を、意地を張って実行しようとしているのか、キナくさいですね。

私？　もちろん「重要ではない」という意味のマイナーになりそうなカード、家族を含め持っていません。

****

イノダコーヒーで・・・

「三条に行かなくちゃ～♪　三条堺町のイノダっていうコーヒー屋にね♪」

独特な語り口や歌声とモフモフひげでおなじみのフォーク歌手、高田渡さんが亡くなって、２０年近くになるんですね。ツアー中に釧路の病院に担ぎ込まれ、そのまま５６年の生涯を閉じました。

彼の熱心なファンだった訳ではありませんが、こちらを油断させてしまう、まったりとした歌の世界についつい引き込まれてしまいます。その名曲「コーヒーブルース」の冒頭に出てくる京都・イノダの焙煎された有機レギュラーコーヒー豆が届きました。COOP経由ですが。

今や超有名店になり、京都市内のあちこちに支店があると聞き及んでいますが、それは脇に置いといて、CDを聞きながら、歌詞に出てくる「可愛い娘（こ）ちゃん」ってどんな顔だろう―と想像しながら、ひと口するグァテマラの味は格別ですな～。

****

デジタルの言い分

紙の保険証廃止反対を唱えているけど、あんたも随分デジタル機器の恩恵にあずかってるじゃないか、と天の声が聞こえます。

その通りです。全否定している訳ではありません。ヴィクトル・ユーゴーが現代に生きていたら、ワープロソフトに真っ先にとびつくだろう、ともいわれます。

最近、「これは便利」と感心してしまうのが、持ち歩きできるスマホの検索機能。道端や庭で初めて目にした草花をパチリ写真におさめ、その場でブラウザを開き、名前を検索すると幾つかの候補で出てきます。先日も、あるお宅で色鮮やかな庭花＝写真＝を拝見しましたが、名前は知らないとか。お節介ながら、検索すると「スイカズラ科ニオイニンドウ（匂忍冬）/別名ハニーサックル」と表示されました。

図書館に行って調べる手間を省くのか、このナマケ者、と―お叱りを受けそうですが、１割組の寿命を考えるとね～。ショートカットさせて下さい。

****

六つ葉のクローバー

上には上があるものです。先月号で五つ葉のクローバーを紹介したら、通信を送るたびにハガキで感想を寄せてくれるIさんから、「５月１３日、早朝ウオークで六つ葉クローバー見つけました」と、イラスト入りの報告がありました。

歩いていて下を見たら偶然、目が入ったとか。その確率は１，６００万分の１だそうです。愛、希望、健康、財運、地位、名誉の「葉ことば」が添えられていました。欲張りません。「愛」と「健康」だけで結構なのですが。

薫風　烈

▶ひと月ほど前、右の腰あたりから下肢にかけて痛みが生じ、座骨神経痛らしき症状が日を追って強くなるばかり。かかりつけのお医者さんに訴えると「長時間、椅子に座りますか」と聞かれ、思い出しました。

「文芸のぼりべつ」４２号に提出した創作を、どうにかして３流から２流作品に格上げしようと、手元のゲラとパソコン画面をにらみながら、結構な時間、改稿作業に没頭しました。あれが、いけなかったらしい。

診察ベッドに寝かされ、両足を持ち上げられたり、端に座って足の上下運動を試してみたり。結局は、湿布薬を出してもらい、数日、張っていたら、痛みは消えました。原稿の一部差し換え作業が、ほぼ終えるのと同時進行のごとく。

さて、体の痛みは消えてくれましたが、作品中の誤字脱字、誤った語句や文節は完全に払しょくされたか。それが心配。ともあれ皆さん、お元気で～。